



○ 面接

2年生が盛んに練習しています。面接会場から名前を呼ばれて入るときから出るまでの間、ほとんどの場合3名くらい(役割分担としては、質問係・メモ係・時間計測係など)の面接官が自分をじっと観察しています。返事の大きさは?戸の開け方(閉め方)は?お辞儀をする位置は?あいさつはいつ?出身校名・受験番号・氏名のほかに言うことは?椅子に座る(立ったまま?)タイミングは?場所?質問に対して考える時間は?語尾表現は?...と立ち居振る舞いだけでも気になることはいっぱいですね。ましてやどんな質問を受けてどのように応えるかとなると、本番勝負という部分もあり緊張し悩むところでもあります。

私はこれまで面接官になったことがあります。面接を受けたこと(9年前にもありました。昨年までも毎年あったような)もたくさんあります。中学校勤務の時は3年生に対して面接練習をしていました。そのような経験をもとにこれから面接を受ける若者へのアドバイスを一つだけ挙げなさいと言われたら、「誠実」と答えます。面接官はたくさんの人を見てきていますから、表面的に繕った一見立派な回答は見抜きます。何よりも受ける会社や施設、園に対して誠実に、面接官に対して誠実に、そして自分自身に対して誠実に受け応えをすることが大切だろうと思っています。

高校入試前の中学校3年生の面接練習をしていたとき、私はいくつかの基本的な質問のあと、受験者が困ってしまうような問いの一つだけわざと出していました。その一例を次に紹介します。実際にはこんな問いはされないと思いますが。

「この絵画を鑑賞して思い浮かべた音楽の曲名を述べてください。また、その音楽を思い浮かべた理由を具体的に述べてください。」

ジョルジュ・ブラック作 「小円卓(静物、バイオリン)」

抽象的な絵画作品は何が描かれているのか一見分かりません。「私には絵画の知識がないので…」と“いなす”人はよくいます。しかし、この質問は絵画の知識を問うているものではありません。この絵画からあなたは何かを感じましたか?と問われているのです。誠実に鑑賞すれば何かを感じることは誰にでもできます。これは自分自身に誠実であるということだと私は思います。次に、感じたことをどのようにして質問者に伝えるか(どのような言葉を選んだら、伝わるか)という誠実な受け応えが大切です。これは面接官に対して誠実であるということだと私は思います。この“意地悪な問い”に対する答はありません。ではなくて、受け応えする人の数だけあります。



ちなみに、私が「小円卓」から個人的に想像した音楽は次のようなものです。

「オーケストラによるコンサートの開演前、バイオリニストが控室で集中力を高めようとしている場面のようなものを想像しました。演奏するのは力強い前向きな内容の曲ではないかと考えます。曲名は出てきませんが、私の耳には元気の出るような音が響いています。」

これから面接を受けようとしている諸君、参考になったかな? 逆にかえって難しくなった?



← ピカソたちが使った一つの技法「キュービズム」(立体派)

対象物をいろいろな角度からとらえ、画面の中で再構成する手法。左の絵は「正面も横顔も同じ人物」ということでそれを組み合わせて構成したものです。ちなみに体は背中です。ブラックの作品もキュービズムの技法です。